

## 源氏物語の創作過程の研究

著者	呉羽 長
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文第287号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59993">http://hdl.handle.net/10097/59993</a>

## 源氏物語の創作過程の研究（論文要旨）

呉 羽 長

『源氏物語』を統一した作品世界として捉える際、その展開の相を作者の精神の深化との連関において解明することが有効である。その解明は、本作品において、作者がそれを展覧する自己を作中に跡づけることなどから可能になる。こうした立場からの創作過程の解明を課題として研究を進めた。作者の精神と物語世界の展開とが動態的に連関する様相の把握は、作品の内部世界が変容することに依拠してその方法を変えることが求められる。

光源氏の青年期においては、成立論の成果を踏まえて『源氏物語』の始発のありようを想定し、その構想に着目して展開の相を辿ることとした。その上で、物語が長編の様相を見せる中で作者の思いの現れと見なせる叙述に注目しつつ、構想論・人物論的に展開の方向性を探り、その壮年期に及んだ。更に、晩年期以降には『紫式部日記』に見られる作者紫式部の独自の思考の形が物語中に反映する度合いを強めることから、その様相が物語展開に及ぼす作用にも着目し、展開の必然を明らかにした。作者は自己の姿を移していくとき、その生意識をも移し入れ、作中人物の生の押しつめの果てに、物語展覧に懷疑する自らの姿を写し出す。そうした見通しにおいて、作品世界を、光源氏の物語〔青年期・壮年期・晩年期〕、及び薫の物語と分け、その創作の過程を究明した。

### I 光源氏の物語（青年期）

本作品では長編的構想が作られる前段階として若き源氏をめぐっていくつかの小話の存在が叙述間の齟齬などにより想定でき、その小話を核に長編物語の様相をもつて巻々が重ねられる際、短編的な巻々が加えられ源氏流謫以前の青年期の物語が整えられていったものと考え、現行の、短編的巻を挿みながら長編の様相を成すに至った経緯を明らかにした。源氏のこの時期の色好み像の特性は、物語が右のような経緯によって作られた故のものであるといえる。なお長編の構想が整えられる際、藤壺との道ならぬ恋が須磨流謫を導くという当初の筋立てであったものが、帰京後の源氏の生を射程に入れる中で、右の密通の罪を隠蔽するため朧月夜の登場を要請することになった。

### II 光源氏の物語（壮年期）

物語の構想が壮年期に推し進められるとき、源氏は彼と藤壺との間に生まれた冷泉の帝就位後の後見、六条御息所の娘斎宮の冷泉帝入内、明石姫君の同帝東宮への入内という契機を得て政治的成功の道を進み、「藤裏葉」巻で繁栄の頂点に至る半生を辿る。帰京後の源氏の政治的成功の路線への据え直しは「濡標」巻に見られるところであるが、一方、そうした巻々に対して中の品の女君たちとの交渉を描く「蓬生」以下の巻々が、帚木三帖・「末摘花」巻を受けて作られる。そこには本系の路線から自由な、自律的展開が見られ、物語は源氏の成功譚の枠の中に入りきれないものを胚胎し、源氏を相対化していく。

### III 光源氏の物語（晩年期）

作者は源氏の栄光の半生を辿った後、その晩年の姿を描き、最終的に彼の生を円満な終焉に至らせようとした。そのために源氏の罪の応報の問題を解決しなければならない。こうして柏木の女三宮への侵入までを描くとき、女三宮降嫁による紫上の苦悩、その果てに「若菜」下巻で重患に陥る彼女の姿を描かねばならなかった。紫上は、宮降嫁後の逆境下に源氏の妻たる幸い人としての「よそのおぼえ」を維持するため、内なる瞋恚を隠蔽する心術を働かせ、独自の理想的人間性を獲得するが、そうした彼女の、自らを見つめつつ他者の穿鑿から逃れようとする姿勢は、作者自身の生意識の反映として捉えることができる。作者固有の精神性が紫上の理想性を作り出したといえる。また重患を経た後、死の強迫を契機として紫上の源氏を見る眼差しが変化することには、源氏との愛情生活を意味づけようとする意図が読みとれる。柏木と女三宮の密通事件によって罪の応報に深く思い致した源氏であつたが、その体験を経て、「幻」巻で紫上の愛情を反芻する彼の姿は、前巻「御法」の紫上の眼差しと呼応するものとして、そこに二人の仲らいの帰結を見ることができ、二人の関係性については、窮極で通い合うことのないそれとして捉える解も行われているが、源氏が紫上を哀傷しながら後世を求める姿への語り手の一体化が、作者の源氏へのそれとして読みとれることから、そこに「愛の物語」の完結を志向し源氏を心穏やかに後世に向かわせようとする作者の意思を捉えてよいと考える。

### IV 薫の物語

物語続篇（薫の物語）は、右の源氏と紫上の間に営まれた愛情生活の完結を受けて、新たに柏木救済のために薫の出離に向けた道心のあり方を模索しようとして書き継がれたものと解するが、その目論見において薫の宇治姉妹との恋が描かれ、大君の結婚拒否と死、薫の中君恋慕と中君の匂宮正妻としての地位の確保、浮舟の匂宮との恋に発する入水決意そして出家までが辿られていく。そこには作者の物語を繰り広げる際の意識の反映が見られる。その意識とは、彼女が宮仕えを通して痛感した、身の程の拙さの自覚であり、それ故に自らを厳しく見つめ、一方で男女の恋の世界に憧れつつも晴れやかな物語的世界に浸ることが自分には許されないという思いである。作者は物語を展覧する中でそうした懷疑の念を膨らませてきた。その内面が作中の大君・浮舟に移され、独自の人間像が作られる。大君造型では、自分を見つめつつ作中人物を操作する作者の心の形が彼女に移され、浮舟においては、作中の恋を「あだ」とする作者の意識が浮舟内部に強まる中で、匂宮との逢瀬という自ら抗うことのできなかつた所行に心を苛むことになる。それが、女君との交渉によつて薫の聖心を深め維持するという当初からの目論見を中断させ、これ以上物語を進めることを不可能にしたといえる。

以上、本研究は、『源氏物語』の始発から終焉に至る展開の必然を、制作の経緯や構想の変化、更に作者の創作に関わる独自の意識の動態に着目することで、明らかにしたものである。

提 出 者	呉羽 長
論文審査担当者	(主査) 教授 佐倉由泰 教授 佐藤伸宏 教授 佐藤弘夫 准教授 横溝博
論 文 名	源氏物語の創作過程の研究
<p>本論文は、『源氏物語』の冒頭から結尾に至るまでの構想の動態を捉え、作品世界の全体像を生動的に提示することをめざした考究である。論文全体は、序章、終章を含む二十章から成り、本論となる十八章は四部に分けられている。</p> <p>五章から成る第一部では、光源氏の青年期までを語る物語序盤部の記述を考察し、第一章では、光源氏をめぐる小話群が一旦成り立った後に、長編化が構想され、物語が再構成されたとする理解を提示し、第二章では、こうした長編化の構想の下、冒頭の「桐壺」巻が物語の総序として成立したことを論じ、第三章では、長編物語としての構想の進展の中で、光源氏に古代的な「色好み」の性格が新たに付与されたことを指摘し、第四章では、そうした構想の進展のあり方を帚木三帖の記述のうちに捉え出し、第五章では、朧月夜をめぐる物語が藤壺をめぐる物語に付加されたことによる構想の変更を論じている。続く第二部では四章にわたり、壮年期の光源氏をめぐる物語の構想の変転を考察している。第六章では、「漣標」巻の記述が以前の物語の路線を集約的に据え直し、光源氏の政治的成功を語る構想を新たに推し進めていることを指摘し、第七章では、そうした構想から離れた自律的な記述が「蓬生」巻、「閑屋」巻のそれぞれでなされていることを論じ、第八章では、光源氏像の変容のうちに、第九章では、玉鬘像の変容のうちに、それぞれ玉鬘十帖における物語の構想の変転を捉え出している。第三部では六章にわたり、晩年期の光源氏を語る物語の構想の深化を考究している。第十章では、六条院における紫上の悲しみの深まりと新たな理想性の獲得を明らかにし、第十一章では、晩年期の光源氏が評者性と演者性をあわせ持つことの意味を考察し、第十二章では、「鈴虫」巻の記述で、光源氏の死をめぐる物語の構想に変更が生じたことを述べ、第十三章では、その変更によって、「御法」巻で紫上の死が語られるに至ったことを論じ、第十四章では、「御法」巻の紫上に利他的な心性が際立って現れることとその意味を指摘し、第十五章では、「幻」巻に光源氏の心の救済が描かれているとの理解を提示している。第四部では、物語の続編としての薫の物語が担う構想上の課題を考察し、第十六章では、宇治大君が薫の求婚を拒み通すことの意味を論じ、第十七章では、道心と俗心とをあわせ持つ薫の造型が物語の構想上の課題に即したものであることを指摘し、第十八章では、物語の構想の変更によって、薫と浮舟との再会のないままに物語が閉じられたとする見解を示している。</p> <p>以上の考究は、『源氏物語』の本文全体を視野におさめた実に丹念な読解を支えとして、表現展開や人物造型の考察においても重要な新見を豊富に含み、物語の全体像の理解をきわめて独創的に提示するに至っており、その成果は、斯学の発展に寄与するところ多大なるものがある。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	